

岡道男先生から教わったことの三番目

吉 武 純 夫

岡道男先生から教わった数多くのことの中で、私にとって一番大きなことはやはりギリシア語の読み方であり、二番目に大きなことは劇というものの読み方でしたが、恐らく三番目に来るのは、宗教とは何かということではなかったかと考えています。それはある夕方たまたま先生が指摘してくれたことに由来しますが、そのことを思い出に記したいと思います。

速読で有名な先生のツキジデス講読の演習は、私が文学部三回生になったときに始まり、それから五年と少しかかって全巻を読了して終わりました。受講者は年により少なくなり、三人という年もあり、日により一人ということもありました。この演習授業は、先生がいつも、原文を不器用に訳する私に、うまい訳というのとは違う、原文に絶妙に即した読み方をいつも聞かせて下さったことで、私にとって一番かけがえのない授業でありましたが、先生と共に五年間走り続けたということから、私が勝手にですが先生との同盟者意識を培った時間でもありました。毎週金曜の夕方、この授業が終わると、研究室を辞する前に、心地よい疲労感に浸りながら先生とひとことふたことの雑談をすることがよくありました。

私のペロポネソス戦争が始まって四年目の秋、すなわち修士課程二年次の11月、私は故郷で結婚式を上げることになりました。そのために帰郷する前の最後にでた授業はこのツキジデスでした。学生結婚する私は研究室のどなたにもわざわざ北海道まで来ていただくことなど考えてもいませんでしたが、授業の後で先生はやさしくも、結婚式に行つてあげられなくともよろしいですか、と仰られて、キリスト教会で挙げる私の結婚式のことが話題になりました。その時に先生にお話したのは、式の中の聖書朗読のことでした。親しい司祭が、式中の聖書朗読は好きな個所を選んでよいと言ってくれたので、最終的には「宝を天に積み」(Matt.6.19-21)という個所を選んだが、惜しみつつ捨てたのは「敵を愛せよ」(Matt.5.43-48)という個所であったことを言いました。これを聞くと先生は笑みを湛えて、後者について次のようなことを聞かせてくださいました。すなわち、アガパーテ・トゥース・エクツルース・ヒューモーンの、

エクツルースの部分は通常「敵」と訳されているが、この言葉は「敵」という前にまず「憎い者」、「嫌いな者」のことなのだ、だからこのパッセージは、憎い人を愛すること、嫌いな人によくしてやることという日常生活のレベルで捉えることを忘れてはならない、これは本来的に人間にはできないことを神の名によって命じたものなのであり、そこにこの教えが宗教の枠組みの中でしかなされなかったわけがあるのだ、ということでした。新約聖書や宗教に関わることを授業で聞く機会はほとんどありませんでしたが、ずっと考えていたことを思わせる確信に満ちたお話でした。

ギリシア語の原文を吟味するとなるほどまさにその通りだと私は納得しました。私はそれ以前にも、エクツルースを「敵」として捉えた解説しか見聞きしていませんでしたが、それ以降も同じでして、キリスト教倫理の根幹部分と神の権威の関係を、また宗教が絶対者を必要とする理由をこれほど鮮やかに説明してくれた人はありませんでした。もちろん、この考え方をした人が岡先生の他に誰もいなかったわけではないでしょう。しかし、新約学者、宗教者でなくとも、ギリシア語を読む者は自分でこういうところを当り前に読取らなくてはならない、ギリシア語で考えるとはそういうことなのだ、ということはこの日私は理解しました。

先生が宗教的な人であったかどうかは存じません。しかし、戦後大阪に引揚げてこられてからいろいろの宗教的学習会を覗いてみたことがあるとも言っておられました。学問と離れたところでそうして暖めておられたに違いないご自身の宗教観の最も鮮烈で魅力的な一端をうかがう機会を得たことも、岡先生のツキジデスを戦った収穫でした。